

小説における呼称語の分類とその表現性

吉仲 聖沙

I. はじめに

日本語には、さまざまな呼称がある。「あなた」「お母さん」「先生」「職人さん」といった呼び方から、「田中さん」「ちよ」といった固有の名前での呼びかけなど、さまざまなバリエーションが確認できる。呼称の問題としては、日常的な場面のものが多数指摘されており、鈴木孝夫の『ことばと文化』では、親族関係を中心する上下関係間での呼称の問題が取り上げられている。このような日常的な問題以外にも、物語世界の中でも呼称の問題が取り上げられることがある。

人物呼称の問題でしばしば指摘されるのは、『源氏物語』をはじめとした平安王朝物語に関するものである。古典文学において呼称に対する意識は高く、場面に応じて呼称が使い分けられている。『源氏物語辞典 改裝版』の「人物呼称」の項によると、光源氏は、「君」「源氏の君」「大将の君」「男」といった呼称で呼ばれる。このうち「男」は男女を意識させる場面で用いられ、「源氏の君」といった呼称は光源氏を公的な場を離れた「私人」として捉えた呼称だという。このように、古語による呼称の呼び分けを追究したものは多いが、現代語においては呼称の表現性はどのように見られるのだろうか。

夏目漱石の『こころ』では、「私」「お嬢さん」「奥さん」「先生」そして「K」といった人物が登場する。それぞれ、人称代名詞、普通名詞、固有名詞で呼ばれている。このような呼び分けの違いは簡単に指摘できるが、こうした人物呼称の呼び方の違いにはどのような表現性の違いが表れるのであろうか。人称代名詞で呼ぶ場合と、固有名詞で呼ぶ場合には表現性の違いは表れるのだろうか。どのように人物呼称に表現性を求めるかは、作家によって意識の

違いが表れる。作家個人の意図を問わず、呼称に用いられる語による表現性の違いを整理することが本稿の目的である。

先行研究としては、前記した古典文学のものや、日常語としての使用の調査、作品論と関連して呼称の問題を読解に取り入れているものが見られるが、広く呼称の問題を整理したものではない。本稿では、川端康成の『掌の小説』を資料に、呼称に用いられる語を「呼称語」として用例を収集し、その機能と特徴を整理・分類した。一つの作品の解釈に留まらず、小説全体においての人物呼称の機能性を俯瞰する内容を目指した。また、実例を挙げてその表現性の可能性も示す。

『掌の小説』から抜粋した用例についてはアスタリスク（*）と、小説の題名で示した。川端康成の呼称の研究に偏らないよう、他の作家の作品も必要に応じて取り上げた。

Ⅱ．呼称語の定義

登場人物を指す語を〈呼称語〉として扱う。「登場人物」とは、物語を動かす「キャラクター」を指す。そのため、『なめとこ山の熊』の「熊」や、江國香織の『デューク』で登場する犬の「デューク」といった動物のキャラクターであっても「登場人物」と考える。

作中は様々な登場人物の呼称が挙げられるが、不特定の人物を指示する呼称は、対象外とする。〈呼称語〉として考えるのは、〈個別化〉され、〈特定化〉された呼称のみとする。

（１）彼女はアメリカ人と結婚したいようだ。

この例では、特定のアメリカ人を指すわけではなく、アメリカ人というカテゴリに属する人間を指示しており、アメリカ人なら誰でもいいといったニュアンスになる。対象をある種のカテゴリに限定することを〈個別化〉とする。特定のアメリカ人に限定できる場合を〈特定化〉とする。

（２）彼女はあのアメリカ人と結婚したいようだ。

(1)の文では特定の「アメリカ人」に限らないが、(2)では、指示語や、文脈によって対象が限定される。このように人物を特定の誰かに限定することを〈特定化〉と呼ぶ。

下記の例は、特定化できる例と、特定化できない例である。

(3)「おとうさん、ごめんなさいませ。許して下さい？え、許して下さいさらないの？私夜も寝ないで番をしているんですけど……。」

(*「屋上の金魚」)

(4)村の中学生たちは倶楽部を作って日曜毎に小学校へ集まった。もう教員に彼らを叱る資格はないし、多くは村の有力者の息子だった。

(*「二十年」)

(3)の「おとうさん」「私」は、作中で一人の人物に特定できる。それに対して(4)の「村の中学生たち」や、教員は、〈個別化〉されてはいるが、〈特定化〉することはできない。本稿では指示対象が〈特定化〉されているものを収集し、〈個別化〉されてはいるが〈特定化〉されていないもの、指示対象があいまいなものに関しては対象外とした。なお、(4)「村の有力者の息子」は形容詞的表現であり、呼称語には数えられない。

Ⅲ. 呼称語の機能

呼称語の機能をまとめると、下記ようになる。

(5) A 呼ぶ相手进行特定する機能 (指示機能)

B 呼びかける機能

C 性質・属性を表す機能

D 関係性を表す機能

(a) 公的な関係性 (社会的な関係)

(b) 私的な関係性 (呼び手の感情・評価)

(A) は誰を話題に上げているかを特定化する機能である。叙述の対象を指示する機能である。

(B) の呼びかける機能は、(1) の「お父さん」のようなものである。主に会話文で見られる。呼称の使用においては、〈呼ばれる対象人物〉と〈呼び手〉の二者の関係を考慮する。〈呼び手〉が〈呼ばれる対象〉の注意をこちらに向け、〈呼び手〉が誰に話しかけているのかを明示する機能である。

また特殊な例として地の文において語り手が心中で登場人物に呼びかける場面もあげておく。

(6) 不二夫少年よ！ 君が青年の日を迎えた時にも、女に「バツタだよ。」と言って鈴虫を与えた女が「あら！」と喜ぶのを見て会心の笑を洩し給え。

(＊「バツタと鈴虫」)

「不二夫少年よ」、「君」という二人称に、呼びかける機能が見られる。

(C) の機能は、「お父さん」という語であれば、対象が男性であること、父親であることを表し、(6) の「不二夫少年」、では、年齢や性別が示されている。

「お父さん」は呼び手と呼ばれる対象が血縁関係であることを示す。血縁関係は生まれつきのものであるが、社会的身分や職業によって、呼び手と呼ばれる対象人物との関係性の捉え方が呼称に表れる。このように、社会的な身分や、職業、また、血縁関係などを表す機能を〈公的な関係〉とする。

「お父さん」という呼称は、血縁関係の者や、それに準ずる戸籍上の親子関係の者が使用するが、社会的身分や血縁関係、上下関係を越えて、登場人物がその相手を尊敬している場合に「お父さん」という呼び方が尊称として用いられる場合もある。「先生」という尊称も同様である。本来は教師や医者といった、なにか専門技術を持った人物に対してか、あるいは〈呼び手〉との間に教える者と教わる者の関係を想定する語である。しかし、呼び手が相手を「先生」と呼びたいと考えたときには「先生」という呼称が使用されることもある。

例として夏目漱石の『こころ』の一部を取り上げる。

(7) 私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。

上記の例では、「先生」は職業上の教員というわけではない。「私」と「先生」とは偶然知り合った間柄であるが、「私」にとって「先生」と呼ばずにいられない存在である。このように、社会的な属性・性質とは関係なく、〈呼び手〉の個人的な感情や関係性が表れる機能を、〈私的な関係性〉を表す機能とする。

それぞれの呼称によって、(5) にまとめた機能には表れ方に差異がある。たとえば、(A) の特定化する機能であるが、

(8) 彼女はよく中学生と歩くのです。

(8) の「中学生」は、前後の文を読まなければ「中学生」が特定の人物か、それとも不特定多数の特定されない中学生かは読み取れない。文脈に左右されずに特定化される性質を、〈特定性〉と呼ぶこととする。文脈による〈特定化〉がされる語は、呼称語としての〈特定性〉が低いことを示す。反対に、固有名詞などの、特定の人物だけを呼びあわす語は〈特定性〉が高いといえる。

また、人称代名詞に見られる特徴として〈境遇性〉がある。

(9) A: ぼくは、君と出かけた。

B: ぼくも、君と出かけた。

上記の例ではAとBの会話の中で、「僕」「君」という呼称語が指示する対

象が発話者によって変わっている。三上（1972）では「境遇性とは、簡単に言えば、場面に左右される性質である。話者と相手とが或る時或る所で差向いになることによって言葉使いの場面が成立するが、言葉を記号の面から見るとき、対象（または概念内容）との対応が一定不変なものと、場面次第で記号を取り換えなければならないものとある。後者の記号を持つ性質を境遇性と名付けておく。」とある。

以上、呼称語にはさまざまな機能があることを確認したが、これらは、それぞれの呼称語によって、機能に差が見られる。（5）にまとめた機能と、〈境遇性〉〈特定性〉といった性質をもとに、呼称語を分類する。

IV. 呼称語の分類

分類については相原（1988）を参考として、本論文では大きく下記の5分類とした。

- (10) 個別名称呼
- 普通名称呼
- 代名詞呼称
- 指示語呼称
- 数詞呼称

さらに、それぞれの呼称は細分化できる。それぞれの呼称語の特性を、（5）にまとめた機能と絡めながら述べる。『掌の小説』内での呼称の一覧も記載する。

IV-1 個別名称呼

項目ごとの表は、『掌の小説』での呼称語の一覧である。個別名称呼をさらに細分化して記載した。また、（10）にまとめた各呼称のそれぞれの項にも同様の表を記載する。

地の文・会話文は、呼称語の表れ方や機能が違うため、分けて記載した。地の文では記述の機能が強く表れるが、会話文は話題の対象を表すほか、呼

びかける機能が表れやすいといった特徴がある。

	地の文	会話文
本名	春三、百合子、不二夫、澄子、梅村、お信、勘三、多津子、勝子、千代子、ケン、百合子、古村ちよ子、田中千代松、千代松、ちよ、堀山岩男、佐山ちよ子、ちよ子、千代太郎、弓子浅田、新吉、お加代、田村、お豊、加代子、お浅、五郎、七左衛門、雪子、アンナ、ダニエル、八兵衛、大竹、メリイ、市丸、杉丸、砂丸、金丸、春吉、駒千代、蘭子、辻、さと枝、きみ子、啓吉、田山、絹子、芳子、和子、島村夫婦、芳子、加代子、道子、あき子、直治、稲子、篠田、神田りつ子、村野、ゆき子、吉郎、敬助、路子、栄子、井口、洋助、茂子、小宮、島木すみ子、すみ子、野口、妙子、野田三吉、三吉、大沢中尉	澄子、澄ちゃん、容子、ちよ、浅田、安藤、お加代、加代子、中野時彦、アンナ、八兵衛、健坊、大竹、町子、市丸、橋丸、千丸、蘭子、琴子、きみ子、芳子、島村さん、房江、好子、井口、秋子、道子、みさ子、とし子ちゃん、好子、百合子さん、竜雄さん、ケンさん、ちよちゃん、安藤さん、新吉君、浅田さん、加代子さん、根並氏、八兵衛殿、金丸さん、杉丸さん、市丸さん、健ちゃん、中野さん、雪子ちゃん、ボヴレ工先生、蘭子さん、三橋先生、好子さん、みっちゃん、敬ちゃん、道子さん、野口さん、きみ子、きみちゃん、下田博士
あだ名	バビジン、馬美人、「青丹」、十六番（ゼヒチェン）、九番（ナイン）	有難うさん、馬美人、イヤデスさん
記号名	B子、S子、P子、A子	S子、Y

表－１

固有名呼称は、呼称語単体で登場人物を特定化できる。「春三」「ちよ」「多津子」といった登場人物のもともと持っている名称をはじめ、「九番」「馬美人」「イヤデスさん」といったあだ名も含める。さらに「B子」「Y」のよう

に、イニシャルを用いたものもこれに含めることとする。それぞれ〈本名〉、〈あだ名〉〈記号名〉と呼ぶことにする。

〈本名〉は、「春三」「ちよ」のように、名称から男女の区別がつくものや、「ダニエル」「メリイ」のように、出身国を予測できるものがある。名前そのものから登場人物の人間性は読みとれず、あくまでも慣習的に性別や出身が予想できるのみである。

物語特有の性質として作品の主題と大きく関わる名付けが行われることもある。

(11)「はい。」素直に答えて、百合子は一輪の百合の花になった。

(*「百合」)

物語の最後に百合の花になる「百合子」は、作品の主題をその名をもって象徴的に表している。

会話文では「～ちゃん」「～さん」「～博士」といった敬称がつけられることが多い。名前そのものには公的な関係や私的な関係を表す機能はないが、苗字か名前のどちらで呼ぶか、どのような語尾をつけるかで関係を示すこともできる。

〈あだ名〉は、呼び手、もしくは呼び手が属するグループによる名付けが行われる。名付けは相手の特徴を取り出して行われる。

(12)山尾はアサシオとよばれていた。郷土がほこる関取、アサシオの体型によく似た肥満体だったからだ。

(『海がきこえる』氷室冴子)

(13)「今日学校へ行ってみんなにあだなをつけてやった。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだい三。今にいろいろな事をかいてやる。さようなら。」

(『坊っちゃん』夏目漱石)

(14) 僕は名も知れない女給を胸に附けた番号のドイツ読みで呼び、大きい眼が腺病質に潤んだ青い少女を花札になぞらえて「青丹」と呼

んだ。三越の十六番（ゼヒチエン）と白木屋の九番（ナイン）とが僕らの人気の中心だった。

（＊「処女作の祟り」）

（12）では、体格のよさから関取の名前にちなんで「アサシオ」という名付けが行われ、（13）では教頭が着ている赤シャツが特徴的なことから「赤シャツ」と呼んでいる。これは一種のメトニミーの用法である。さらに（14）では、相手の名前や素性がわからないことから、番号による名付けがされている。

登場人物が自称するパターンもあるものの、あだ名はほとんどの場合、相手の許可を得ずに名付けを行うため、名付けそのものが相手にとって「失礼な」行為にあたる。相手が親しい間柄なら、「失礼さ」は「親密さ」に繋がるが、相手との関係性が希薄な場合や、反発し合っている場合は「失礼さ」は相手への「攻撃性」を表す。（12）は主人公と親しい間柄の人物の呼称、（13）は心中で反発心を抱く人々の呼称である。（12）は相手に直接このあだ名を用いることもあるが、（13）や（14）では相手に対して直接この名称を使うことはない。また、あだ名は呼び手や呼ばれる対象が特定のコミュニティに所属していることを示す呼称でもある。（12）の例なら、高校というグループ内での呼称語ということになるし、（13）の「赤シャツ」の場合でも、のちに「山嵐」とこの名称を共有している。

最後に〈記号名〉の特徴をあげる。『掌の小説』では「Y」「S子」といった人物が登場する。『こころ』の「K」は有名であるが、他にも数点記号名を用いた作品が確認できる。たとえば梶井基次郎の『Kの昇天』の「K」や、村上春樹の『七番目の男』に登場する「K」、倉橋由美子の『聖少女』では「K」「L」「M」などが確認できる。記号名は、呼ぶ対象を特定化する機能は高いが、性質や属性、関係性を表す機能がない。

（15）お手紙によりますと、あなたはK君の溺死に就て、それが過失だったろうか、自殺ならば、それが何に原因しているのだろう。或いは不治の病をはかなんで死んだのではなかろうかと様ざまに思い悩ん

でいられるようであります。

(梶井基次郎「Kの昇天」『檸檬』)

(15)のような手紙や手記の形式のものなど、記号名が用いられる形式は読み手を意識した文体が多い。相手に本名や素性を知らせないための匿名の意識が見られる。そのため、謎を仕掛ける道具としての役割があたえられていることが多いようである。

以上をまとめると下記ようになる。

〈固有名呼称〉：特定性が高い。

〈本名〉：人物性は表さないが、性別や国籍を予想することができる。

また、作品のテーマに関わる名付けがされることもある。

呼び方によっては私的・公的な関係性を表す。

〈あだ名〉：その人物の特徴的な一部分に注目して名付けるため、性質・属性を表す機能が高い。

私的な関係性を表す。

〈記号名〉：属性・性質・関係性を表さない。

IV-2 普通名呼称

普通名詞に分類される語を用いた呼称を〈普通名呼称〉とする。「男」「百姓」「主人」「姉」といったものが挙げられる。

特定性が低いため、文脈や指示語などの修飾語によって呼ぶ対象を特定化しなければならない。性質や属性を表す機能が高く、呼び手との関係性を表す機能が高いものも多い。

芥川龍之介の『羅生門』には、「下人」「老婆」という普通名呼称が用いられており、二人の人物の本名が作中で明かされることはない。「下人」「老婆」という社会的な弱者としての役割が物語の主題にも関わっている。

普通名呼称をさらに、呼び手との関係性の示し方によって、〈一般名〉〈親族名〉〈職業名〉〈身分名〉に分ける。

	地の文	会話文
一般名	婆あ、男の子、女の子、娘、少女、男、女、少年、子供、お婆さん、老人、婆さん、赤子、小僧、赤ん坊、娘子、女郎、京女、女の人、坊や、若もの、婦人、令嬢、金持	ぼんさん、女、お嬢ちゃん、お婆さん、ねえさん、おじさん、おばさん、男、娘さん、子供、小僧っ子、赤ちゃん、坊や、ばあさん、令嬢、坊ちゃん、病人
親族名	祖父、叔父、二親、従兄、兄、親、母、妻、亭主、女房、夫婦、母親、姉、妹、娘、子供、継母、妻、夫、両親、孫、父親、弟、息子、兄貴、奥さん、姉嬢、長男、細君、次男、伯母、義兄、お母さん、お父さん、坊や、嫂、祖母、亡妻、おばさん、老父母、伯父、夫人、	お祖父さん、お父さん、お母さん、おっかさん、父、倅、兄さん、父さん、かあさん、母、弟、おとうさん、亭主、夫、お父様、親父、女房、御亭主、おふくろ、おやじ、お舅さん、母さん、お母あさん！、女房、奥さん、妹、旦那、かかあ、姉さん、ねえさん、マミイ、オツカア、嫂さん、お姉さま、お兄さま、お母さま、小母さま、お祖母さん、お姉ちゃま、お父さま
職業名	商売人、髪結い、医師、小説家、キネマ女優、監督、ウェイトレス、詩人、土方、職工、運転手、郵便配達夫、土工、和尚、烏屋、武士、坊主、女工、事務取締役、料理店主人、医学大学生、映画俳優、花火屋さん、眼鏡屋さん、眼鏡屋、花火屋、子守、代書人、女中、子守女、僧侶、巡礼、戯曲家、作者、中学生、番頭、子使、ダンス・ガール、娘芸人、客、乞食、看護婦、踊子、写真屋、俳優、美術家、タ	車屋、速達屋さん、おかみさん、お医者さん、お客様、和尚、監督さん、先生

	イピスト、監督、中尉、呉服屋、	
関係名	恋人、先生、友人、許婚、妾、友だち、花嫁、恋敵、友達、婚約者、主人、師匠	恋人、大旦那、女房、恋人、先生、お譲さま

〈一般名〉は「男」「少年」「若もの」「婆あ」といったもので、性別や年齢を示すもの。また、『なめとこ山の熊』の「熊」といった動物の名称もこちらに含める。呼ばれる対象そのものの性質・属性を表す機能が強い。相手と初対面の場合に限らず、相手とさほど親しくない場合や、素性を知らない場合などに用いられるため、相手との関係性が築かれていない場合の仮の呼称として用いられる。

〈親族名〉は、呼び手と呼ぶ対象との親族的な関係性を表す。他の呼称語に比べて、会話文でのバリエーションが多く、呼び方によって呼び手の人柄を感じさせる。たとえば「お兄さま」といった呼び方には、呼び手の身分や上品さを感じさせる。

〈職業名〉は、「ウエイトレス」「百姓」「法科大学生」といった、社会的な職業や肩書を表したもの。こちらは〈親族名〉に対して、会話文で用いられる事がほとんどなかった。呼び手と呼ばれる対象との関係は「店員」と「客」の関係であることが多く、公的な関係性を表し、舞台となる場所に依存した呼び方である。

〈関係名〉は呼び手と呼ぶ対象の社会的・私的な関係を表すもの。「友だち」は相手の性別までは読み取れないが、「花嫁」「妾」といった語は性別が読みとれる。

〈普通名呼称〉：特定性が低い。属性・性質を表す。

〈一般名〉：客観的な性質を表す。関係性を表さない。

〈親族名〉：性別、呼び手との公的な関係性を表す。呼び方によって
は私的な関係や、呼び手の人柄を表す。

〈職業名〉：職業を表す語。使用する場に依存する。

〈身分名〉：公的な関係性、または私的な関係性を表す。

IV-3 代名詞呼称

〈代名詞呼称〉は境遇性を持つ語である。特定性は高いといえるが、乾くらの『イニシエーションラブ』では「僕」と自称する人物が読者に気づかれないまま途中で入れ替わる例もある。小説の仕掛けとして使用される例であるが、小説において代名詞の境遇性は「誰」を指すのかがあいまいにする機能ともいえる。

「私」「僕」「彼女」「あなた」「自分」がこの分類にあてはまる。さらに分類し、〈一人称代名詞〉、〈二人称代名詞〉、〈三人称代名詞〉〈自分〉とそれぞれ呼ぶことにする〈自分〉は名詞的な側面が強く、他の代名詞と同一視できないため、別のものと考えた。

	地の文	会話文
一人称代名詞	私	僕、わたし、私、おれ、あたし、おら、俺、拙者、余、わたしや、わし、おいら、己（おれ）、あたい、おれ、ぼく
二人称代名詞	君	君、お前、あなた、お前さん、あんた、貴殿、汝、こなた、こち
三人称代名詞	彼、彼女	彼、彼女
自分	自分、相手、私自身、彼女自身	自分、相手、大竹自身

一人称・三人称代名詞は性別を表している。「あたし」という語は女性が使用し、「彼女」は第三者の女性を表している。バリエーションの多さでは一人称代名詞が最も多く、「拙者」「余」といった登場人物のキャラクター性を感じさせるものも多い。二人称代名詞も、呼ばれる対象人物が何者かという情報は含まず、呼び手のキャラクター性を感じさせる。

二人称代名詞は基本的に会話文で用いられるが、「二人称小説」という形式

で書かれた小説も数点あり、地の文でも二人称小説が用いられることがある。多くは「手記」や「手紙」といった形式で、読み手を意識したものが多い。

(16) T Vピープルが部屋に入ってきてから出ていくまで、僕は身動きひとつしなかった。一言も口をきかなかった。ずっとソファーに横になったまま、彼らの作業を眺めていた。不自然だとあなたは言うかもしれない。部屋の中に見知らぬ人間が突然、それも三人も入ってきて、勝手にテレビを置いていったというのに、何も言わずに黙ってそれをじっと眺めているなんて、ちょっと変な話じゃないか、と。

(『村上春樹全作品 1990～2000① 短編集Ⅰ』「T Vピープル」村上春樹)

(17) 私が君に始めて会ったのは、私がまだ札幌に住んでいるころだった。私の借りた家は札幌の町はずれを流れる豊平川という川の右岸にあった。

(『小さき者へ／生れ出づる悩み』「生れ出づる悩み」有島武郎)

どちらも一人称形式の文である。(16)は、二人称小説のように見えるが、「あなた」と呼ばれる登場人物が作中に存在するわけではない。この文での「あなた」は、読者を想定した言葉である。また、(17)は、二人称形式と似ているが一人称小説である。二人称小説は、一人称者が語り手に徹した小説の形式であり、一人称小説と二人称小説を厳密に分けることは難しい。しかし、二人称代名詞を地の文で多用することで、語り手の存在が強調され、「語り」の意識が高まる効果があると考えられる。

〈三人称代名詞〉は「彼」「彼女」の二種類であるが、「彼」「彼女」は、三人称小説において〈一人称代名詞〉の代わりに使用されやすく、『掌の小説』では、「神います」「日本人アンナ」「二十年」「秋風の女房」「舞踊靴」「眠り癖」などの数点が、視点人物に「彼」「彼女」という呼称語をあてている。ミューンの『くらげ』という作品では、登場人物である二人の男女は「彼」「彼女」と終始呼ばれ続け、名前が明かされることはない。三人称代名詞に関しては、性別を表す機能以外にも、視点人物になりやすいという性質があることが推測できる。

〈自分〉は、英語では再帰代名詞とされることもあるが、日本語では名詞的な側面も強く、自称詞や対称詞に用いられることもある。自分を内面的に振り返るときに用いられやすい。

〈代名詞呼称〉：境遇性がある。特定化する。呼びかけや会話での用いられると失礼さにつながる。

〈一人称代名詞〉：属性・性質を表す。

〈二人称代名詞〉：呼ぶ対象の性質を表す機能はなく、呼称語によっては呼び手の人間性や相手との関係性を感じさせる。

〈三人称代名詞〉：性別を表す。

「自分」：名詞的側面が強い。

IV-4 指示語呼称

指示語を用いた呼称をさす。「あの人」「その人」「こいつ」といった人を指すための語や、「こちら」「あれ」といった方角や場所を表す語が呼称語に転用されている例が挙げられる。

	地の文	会話文
指示代名詞	こちら、その子、「その子」、その人、あの子、あの男	こいつ、あいつ、あの人、あの子、その子、こちら、あの方、あれ、この子、あのひと

一人称形式の場合、語り手が現場で見聞きしたものを指すことができるので、指示語呼称が地の文に表れることもある。基本的に先に固有名呼称や普通名呼称で呼ばれてから、この呼称語が用いられる。

「あれ」は、「こいつ」「あいつ」という言い方よりも攻撃性が増す。これは場所よりも、物に使用する指示代名詞であるためと思われる。

(18) 「あれ、お前の妹か」

(*「踊子旅風俗」)

場所を指す語である「こちら」という語は丁寧に感じる。これは、場所を指す語は、その人物のいる方角を指すことで、その方角にいる人物を示すメトニミーな用法であるため、「こいつ」という言い方に比べて直示性が薄いためである。指示語呼称は直示性が上がれば、直接的な指示となるため、相手への「失礼さ」につながる。親しい関係性でその呼称語が許されている場合は「親密さ」を表すことになるが、〈呼び手〉の攻撃性を表す表現にもなりうる。

〈指示語呼称〉：ダイクシス性がある。直示性が強いと私的な関係性を表す。

IV-5 数詞呼称

用例自体はわずかであるが、呼称語として用いられることがある。「一人」「二人」と言った語である。

	地の文	会話文
数詞呼称	二人、一人	二人

(19) 街の子供の一人がある夜この土手で鳴く虫を聞いた。

(*「バッタと鈴虫」)

(20) 姉は二十、妹は十七、同じ温泉場の別々の宿屋に奉公している。

二人とも大変美しくて気が弱い。二人が行き来することは滅多にない。

(*「万歳」)

複数の中から不特定の一人を取り出す場合に「一人」という語が使われやすく、特定の登場人物を対として考える場合に「二人」という語が使われやすい。いずれも、複数の中から注目すべき人物を特定化の際に用いられ、呼称語そのものには性質や関係性を表す機能はない。

〈数詞呼称〉：複数の中から特定化する。

V. まとめ

以上のように、各呼称語によって、表れる機能は差異があり、どの呼称語を選択するかによって、人物関係を読みとらせたり、その場面における人物の役割の変化を読者に示したりする機能があると考えられる。本稿では資料から収集した呼称語を分類し、機能を取り上げた。それぞれの呼称語にはさらに詳しい検証が必要である。

『掌の小説』からは多数の呼称語を挙げたが、現代の小説では、短編であっても登場人物をはじめから固有名呼称で呼ぶことが多いように思う。下記は短編小説の冒頭部である。

(20) 母のミヨ子が死んだという報せが入ったのは、新しくオープンするモデルハウス事業に向けての打ち合わせの最中だった。

(『短編工場』「かみさまの娘」桜木紫乃)

(21) 十四年間勤めた会社が倒産した。三十六歳の湯村裕輔は、それを遅刻した朝礼で社長の口から知らされた。

(『短編小説』「ここが青山」奥田英郎)

(22) 選択できるというのは、むしろ、つらいことだと思う。

マンションの和室で、机に片肘をつきながら僕は母の遺影を飾った仏壇を眺めていた。蛙の模型がついた置時計が、右のサイドボードの上にある。夕方の五時だった。しばらくすると、美咲が帰ってくるはずだ。「で、決まった？」と彼女はいつも通りの、あっけらかんとした口ぶりで訊ねてくるだろう。三十四歳、僕よりも二つ年上の彼女は、僕の決断力のなさをよく知っている。

(『短編小説』「太陽のシール」伊坂幸太郎)

『短編小説』には12編の小説が寄せられている。そのうち9例が、上記のように視点人物、もしくは視点人物の知人の固有名呼称が挙げられる。現代小説の特徴として、最初に名前を提示しておき、徐々にその素性を明かして

いくという形式があげられる。現代小説では、固有名呼称を用いることが一般的であるため、普通名呼称や代名詞呼称を終始使用する小説の方が特殊であり、作家の意図的な仕掛けを見つけやすくなっているのではないだろうか。

今後は現代小説の実例からも多く例を取り上げ、より多くの用例から各呼称を検証していきたい。

資料（用例としてあげたもの）

川端康成『掌の小説』新潮文庫 新潮社 平成元年 改版
夏目漱石『こころ』集英社文庫 集英社 1996 年
夏目漱石『坊っちゃん』岩波文庫 岩波書店 1989 年 改版
氷室冴子『海がきこえる』徳間文庫 1999 年
村上春樹『村上春樹全作品 1990～2000③ 短編集Ⅱ』2003 年 講談社
村上春樹『村上春樹全作品 1990～2000① 短編集Ⅰ』2002 年 講談社
有島武郎『小さき者へ／生れ出づる悩み』1998 年 岩波文庫：岩波書店
倉橋由美子『聖少女』新潮文庫：新潮社 1965
梶井基次郎『檸檬』新潮社：新潮社文庫 昭和六十年
集英社文庫編集部編『短編工場』集英社文庫 集英社 2012 年
乾くるみ『イニシエーション・ラブ』文集文庫 文藝春秋 2007 年

参考文献

三輪正（2000）『人称詞と敬語—言語倫理的考察—』人文書院
鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波書店
鈴木孝夫（1996）『教養としての言語学』新潮社
久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店
秋山虔編（1989）『源氏物語事典 改装版』学燈社 pp. 204-205
三上章（1972）『現代語法新説』くろしお出版
田窪行則（1997）「日本語の人称表現」『視点と言語行動』くろしお出版
山岡實（2001）『「語り」の記号論』松柏社
野村真木夫（2005）「日本語の二人称小説における人称空間と表現の特性」『上越教育大学国語研究 19』上越教育大学

- 野村眞木夫 (2006) 「日本語の二人称小説における人称空間と表現の特性 (2) : コミュニケーションとダイクシスの観点から」『上越教育大学国語研究 20』上越教育大学
- 野村眞木夫 (2009) 「テキストから見た日本語の人称 ―日本語の小説における人称表現とその階層性―」『上越教育大学研究紀要 28』上越教育大学
- 野村眞木夫 (2008) 「コミュニケーションの組織とテキストにおける人称―人称の様相についての問題提起―」『上越教育大学研究紀要 27』上越教育大学
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金水敏 (1986) 「名詞の指示について」『築島裕博士還暦記念国語学論集』明治書院
- 金水敏 (1995) 「敬語と人称表現―「視点」との関連から」『国文学 解釈と教材の研究 40 (14)』
- 林裕二 (1992) 「小説の中の呼称と人間関係―Ishiguro Kazuo の *A Pale View of Hills* より―」『比較文化研究 (92)』日本比較文化学会

(東稜高等学校国語科非常勤講師)